

国際演劇研究集会inインド

民主主義の視点で論議

北野 雅弘

年に一度、世界中の演劇研究者が集う国際演劇研究集会が、今年はインドのハイデラバードで、6日から10日まで開かれた。

今年のテーマは「演劇と民主主義」で、例年同様、テーマを決めたワーキング・グループと若手フォーラム、一般発表に分かれ、400人を超える発表者が一堂に会した。ハイデラバードは観光名所は少ないが、料理、とりわけヒリヤニ（炊き込みご飯）で有名な都市だ。

毎日ある基調講演には、

民主主義と無制限な経済的自由主義が真っ向から対立するという経済学者の話もあり、演劇が現実の政治と密接に結びついていることをいや応なく意識させる。発表でも、自分たちの演劇活動をその政治的意義に即して紹介したり、演劇史を民主主義の視点から見直したりと、とても多彩な主題が論じられる。

聞きに行った中では、地元インドやラテンアメリカでの演劇実践が、素朴に民主主義のためのたたかいと結びつけて語られている

多くの演劇人が反対しているけれど、演劇上演の政治性については消極的な人が多いように思われる。

アジア演劇についてのワーキング・グループでも一般発表でも、歌舞伎、沖繩

演劇、プロレタリア演劇から新劇や「青い鳥」まで、日本演劇についての発表が数多くあり、日本演劇の研究者の積極的な参加が目立った。国際大会という性質上、紹介的な発表が中心になったが、多くの主題を海外の演劇人と共有できたのは有意義だ。日本の「アジア」観が東に偏りすぎではないかという会場からの指摘は、インドでの研究集会ならではの感想。アジアは大きい。

ただ、全体テーマが大きすぎ、また、毎回のことが同時開催のセッションが多くて、興味深いタイトルなのに聴けない発表が多数あったのは残念だった。

私自身はギリシア悲劇と民主主義の関係が意外と小さいのではという内容の発表をしたのだけれど、予想外に好意的に聞いていただき有り難かった。

(きたの・まさひろ

演劇学研究者)

ハイデラバードの街の風景
(ラマダンなので人通りは少ない) 筆者撮影

